

仏教経済学

TANAKA, George / 田中, 穰二

(出版者 / Publisher)

法政大学工学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Technical College of Hosei University / 法政大学工学部研究集報

(巻 / Volume)

21

(開始ページ / Start Page)

9

(終了ページ / End Page)

16

(発行年 / Year)

1985-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004069>

仏教経済学

田中 穰 二*

Buddhist Economics

George TANAKA*

Abstract

This paper i.e. "Buddhist Economics" consists of three parts. In part I, we examine Christian economics in Old Testament. In part II, traditional economic theory including Marx, Keynes and micro-economics is explained. In part III, Buddhist economics which explains the Japanese social and economic behavior is mentioned.

I 聖書と経済

旧約、新約聖書は神の教えであり、信仰の対象として読むこともできるが、これを文学作品として、あるいは人間生活の本として読むこともできる。ここでは聖書を人間生活の本として、特に経済生活の本として、読むことにしよう。

このような観点から見ると、旧約聖書の創世記37～50に書かれているヨセフがあげられ、特にヨセフのエジプトにおける経済活動（創世記41～42）を指摘することができるであろう。ヤコブはカナンに住み、12人の子供を持つが、11人目のヨセフを特にかわいがった。しかし、これは十人の兄達のねたみを買ひ、結局、エジプトに荷物をはこんでいるイシマエル人に売られてしまう。兄達はこのとき、ヨセフからはぎとった着物に、殺したヤギの血をひたして、父ヤコブに見せる。ヤコブはヨセフがけものに食い殺されたと考え、いつまでもなげきつづける。ヨセフはエジプトに連れて行かれ、王の新衛隊長ポテバルの家に売られてしまう。ポテバルは金持ちであるばかりでなく、正しい人で、地位も高く、名誉を重んじる人であった。彼はまもなく、ヨセフが物おぼえが早く、正直であり、ヨセフの手にすることはすべて栄えることを知ったので、ヨセフは彼のお気に入りのしもべとなった。

ポテバルはヨセフをすっかり信用したので、自分の家の内外の仕事を若者のヨセフにまかせ、ポテバルはしばしば家を離れて、身分の高い軍人として活躍した。この間ヨセフはポテバルの家で熱心に働き、ポテバルの財産をふやした。

ヨセフは美しい青年に成長したが、ある日、ヨセフを恋している主人の妻と2人きりで家に残された。主人の妻はヨセフに自分を愛してくれるようにたのむが、ヨセフは主人が自分を信頼し

* 法政大学工学部経営工学科

ているのに、彼女を愛するようなおそろしいことはできないとってことわる。これに対して、ポテバルの妻は大変腹を立て、家に帰ったポテバルに対して、「あなたのあのヘブルのしもべはあなたがいなくなると、わたしに襲いかかろうとしました。わたしが声をあげて叫んだので、ようやく彼は逃げて行きました。」といううそをいいつける。

これを聞いたポテバルは大変驚き、ヨセフを家から連れ出して、王の囚人が監禁されている牢獄に無罪のヨセフを入れてしまう。しかし牢獄の中でも、ヨセフはポテバルの家にと同じように、明るく、かしこく、正直で、よくつとめた。牢獄の番人はヨセフをすっかり信用し、ヨセフに牢の囚人たちをまかせ、監督させた、ヨセフのすることはすべてよい結果をもたらした。

まもなくエジプト王パロの給仕頭と料理頭が牢に送られて来るが、ヨセフは2人の夢から、3日後に給仕頭は許されてもとの場所にもどり、料理頭は3日後にしばり首になることを予想するが、3日後、王パロの誕生日に、それが現実となる。

それから2年程過ぎて、エジプト王パロは奇妙な夢を見る。パロが川の岸に立っていると、7頭のよくこえた牛が水の中からあがって来て、岸の草を食べていた。その後で、7頭のやせほそった牛が水の中から上って来て、7頭のよくこえた牛をみんな食べてしまった。

王パロはまた眠ってしまうと、次の夢を見た。1本の麦の茎から7つよく実ったよい穂が出て来た。やがて別のしなびた、やせた穂が7つ出て来て、よく実ったよい7つの穂を食いつくしてしまった。

王パロは心配になったため、エジプト中の魔術師や知恵のあるものを呼び出して、この夢を話したが、誰1人この夢を説明できるものはいなかった。しかし、給仕頭は牢の中のヘブル人ヨセフのことを王に話した。王の家来達はヨセフを地下牢から出して、王パロの前に連れていった。

王は、2つの夢をヨセフに話した。ヨセフはたいへん注意深く聞いて、次のように答えた。

「2つの夢は、同じことをあらわしています。7頭のりっぱな牛と、みのった7本の穂は、7年の豊作がつづくことをしめしています。7頭のやせた牛と、しなびた穂は、そのあと7年のききんがつづくことをあらわしています。ですから王さまは収穫を監督するかしこい人をさがして、その人に役人をえらばせ、豊作の7年間にできた穀物の5分の1を集めてたくわえ、ききんにそなえなさい。そうすれば、エジプトはききんで亡びることはないでしょう。」

ヨセフの夢の説明に王パロは大変満足し、次のように言った。「おまえの考えは大変よい。ヨセフ、お前は賢い人だ。私はお前に国土をまかせよう。」そして王パロは自分の手から指輪を取ってヨセフの手にはめ、立派な麻の着物を着せ、金のくさりを首にかけ、自分の第2の車にヨセフを乗せた。

このようにカナンのヨセフは17才のとき、10人の兄達に売られながら、30才のとき全エジプトのつかさとなった。ヨセフはエジプトの全土を巡り歩いて、土地の一番よい使い方、生産した穀

物の保存の仕方を民に教えた。豊作の7年間、ヨセフとその役人たちは、どこへ行っても、必ず収穫の5分の1を全体から取って、収穫のなくなる日にそなえた。穀物のたくわえは非常にたくさんになり、はかることができない程になった。

やがて、かんばつがおそってきた。エジプトはナイル川がちょろちょろ流れていたため、隣りの国ほどききはひどくなかったが、その中、自分の家にしまっておいたたくわえがつかぬ日が来たため、民は王に食物を求めた。

これに対して、副王のヨセフは、すべての穀物倉をあけて、豊年のときに集めたたくわえをエジプト人に配給した。たくわえが十分であったので、隣国の人もエジプトに穀物を買いに来た。隣国の人たちの中に、ヨセフをエジプトに売った10人の兄達もいたが、結局ヨセフは兄達を許す。そしてエジプト王パロのまねきによって、父ヤコブとともに10人の兄と1人の弟をエジプトに住まわせる。

やがてヤコブは年をとり、ヨセフを含む12人の子供を呼んで、「おまえたち12人からイスラエルの12の部族が生まれるだろう。おまえたちはみんな祝福されるであろう。」と行って永眠した。ヨセフも死ぬが、エジプトにはイスラエル人の子孫がいっぱいになる。王も新しい王になるが、イスラエル人をにくむため、モーセによる出エジプトが始まり、イスラエル人はカナンに移動する。

この旧約聖書のヨセフの話は将来を予測した経済活動が重要であることをいっているが、同時に経済活動が政治または安全保障活動に弱いことをしめしている。^{(1), (2)}

Ⅱ 従来の経済学

今までの経済学で、わが国の政治に大きな影響をあたえたものとして、マルクス経済学があげられる。これは、資本主義の生産、再生産の中で、資本が蓄積されて資本家あるいはブルジョアが富んで行くのに対して、労働力を提供するプロレタリアが貧困化して行くため、プロレタリアによる資本主義から社会主義への革命が必要であるという見解を取る。

第二次大戦前はマルクス主義は農民運動や繊維労働者の女工哀史などになってあらわれた。農民運動ではプロレタリアの小作人をブルジョアである地主が貧困化していると考え、繊維労働では資本家または経営者がプロレタリアである女工を搾取して、資本を蓄積していると考え、プロレタリアを援助すべきだという見方であった。戦前の軍部の考え方は現在の右翼の考え方に近かったため、このマルキシズムの運動を官憲が強く弾圧した。

戦後はアメリカの日本占領軍本部のGHQの命令によって、軍部を消滅し、財閥を解体し、地主から土地を小作人に解放し、戦争中に活躍した人達は追放されたため、マルキストは急に力を得て人数も増加し、一時は労働組合のゼネストによって、プロレタリア革命が一挙に実現するのではないかということもあったが、これもGHQの命令によって禁止されてしまった。しかし、

マルキシズムは総評や日教組、社会党や共産党の指導理念になっている。

一方、ケインズの雇傭・利子及び貨幣の一般理論（1936年）も世界中で読まれた経済学であった。ケインズの場合は個人または1つの企業という立場から経済を見るのではなくて、国民経済全体の流れの中で、家計全体の消費、貯蓄、所得、企業全体の投資、利子率との関係などをとらえようとする。たとえば、投資の総額は貯蓄の総額に等しいという命題が第6章にあるが、このような投資と貯蓄の定義はこの本が最初であると思われる。日本訳が出版されたのは昭和16年であるが、戦後版の最初は昭和24年である。

ケインズ経済学は日銀の金利政策に用いられている。すなわち不景気のときは公定歩合を下げる。これによって市中銀行の貸出金利が下がるから、投資しやすくなる。また景気が良くて、投資が多すぎるときには、公定歩合を上げて、市中銀行の貸出金利を上げる。

またケインズ経済学は国民所得のとりえ方にも影響をあたえ、今日では国民所得勘定として国民所得をとらえている。たとえば、国民総生産（GNP）＝国民純生産（NNP）＋固定資本減耗；国民純生産－間接税＋補助金＝国民所得；国民所得＋間接税＋海外からのその他の経常移転＝国民可処分所得；国民可処分所得＝民間最終消費支出＋政府最終消費支出＋貯蓄＋補助金；民間最終消費支出＋政府最終消費支出＋国内総固定資本形成＋在庫品増加＋経常海外金剰＝国民総生産；総資本形成＝国内総固定資本形成＋在庫品増加＋海外償権純増；貯蓄＋固定資本減耗＋海外からの資本移転＝総資本形成などの式が成りたつように諸概念が定義されている。この方法は国際連合がきめたもので、各項目の定義の範囲もきめられている。これはわが国だけでなく、自由主義経済圏の国々は何れも国連方式を採用して、自国の経済状態をしらべている。社会主義国では国連方式を採用していない。

一方、ミクロ経済学は消費者の効用極大、生産者の利益の極大、市場の均衡などをとなえており、アメリカ的経営には適合性のあるモデルといえる。

消費者の購入する x 財の量を x 、 x 財の価格を p ； y 財の量を y 、 y 財の価格を q 、 z 財の量を z 、 z 財の価格を r ；（何れも非負の量）とし、総消費予算を B 円（一定）とすれば

$$(1) \quad B = p \cdot x + q \cdot y + r \cdot z \quad (p \text{ の単位は円/グラム, } x \text{ の単位はグラム, } y, q \text{ も同様})$$

となる。財を消費することから得られる満足の度合を効用 u というが、この効用 u はその大きさが測れるとする基数的効用の立場と、単に大きさの順番を表すとする序数的効用の立場とがあるが、何れにしても、効用 u は実数で、しかも消費量 (x, y, z) の関数であると考え。

$$(2) \quad u = u(x, y, z) \quad (u \text{ は満足度})$$

効用 u は $0 < x < x'$ のとき $u(x, y, z) < u(x', y, z)$ となる性質を持つ。すなわち u は偏微分係数 u_x をもち、 $u_x > 0$ とする。他の変数、 y, z についても同様である。

$$(3) \quad u_x > 0, u_y > 0, u_z > 0 \quad (u_x \text{ は } x \text{ 1グラム当り満足度})$$

ラグランジュの未定係数 λ を使って、条件式(1)の下で、効用(2)の極大化を求める。すなわち、 $u + \lambda(B - px - qy - rz)$ の x , y , z に対する偏微分を0とすれば

$$(4) \quad u_x/p = u_y/q = u_z/r = \lambda \quad (u_x/p \text{ は } x \text{ の 1 円当り満足度})$$

が得られ、これは各財に支出した1円当りの満足度が均等になることをいい、限界効用均等の法則と呼ばれている。

生産者の場合は生産量を f (グラム)、投入する要素、資本、労働、材料を k , ℓ , m とし、それらの価格を α , β , γ とし、総費用を C (円)とすれば

$$(5) \quad C = \alpha \cdot k + \beta \cdot \ell + \gamma \cdot m \quad (\alpha \text{ の単位は年利、} k \text{ は円；} \beta \text{ は円/人，} \ell \text{ は人；} \gamma \text{ の単位は円/グラム，} m \text{ の単位はグラム})$$

資本 k 、労働 ℓ 、材料 m の投入に対する製品の生産量 f を次の生産関数であらわす。

$$(6) \quad f = f(k, \ell, m)$$

(6)の f に対して、正の実数を ε とすると

$$(7) \quad \begin{cases} f > f(\varepsilon k, \varepsilon \ell, \varepsilon m)/\varepsilon & \text{ならば 収穫逓増} \\ f = f(\varepsilon k, \varepsilon \ell, \varepsilon m)/\varepsilon & \text{ならば 収穫不変} \\ f < f(\varepsilon k, \varepsilon \ell, \varepsilon m)/\varepsilon & \text{ならば 収穫逓減} \end{cases}$$

という。なお、条件式(6)の下で、(5)の費用 C の極小化を求めるには、 f を定数と考えて

$$C + \mu(f - f(k, \ell, m)) = \alpha k + \beta \ell + \gamma m + \mu(f - f(k, \ell, m))$$

を k , ℓ , m で偏微分したものを0とおけば、次の(8)が得られる。

$$(8) \quad f_k/\alpha = f_\ell/\beta = f_m/\gamma = 1/\mu$$

(8)の第1項は1円当りの資本の限界生産力、第2項は1円当りの労働の限界生産力、第3項は1円当りの材料の限界生産力をあらわす。これらが等しい点が費用極小の点になる。もし、製品の量 f が一定で、製品の価格も一定ならば極小の点は利益極大の点に一致する。(3), (4)

Ⅲ 仏教経済学

旧約聖書では、神がくらやみから光を作り、光を昼と名づけ、くらやみを夜と名づけて、二分することから出発する。

またマルキシズムでは、プロレタリアである善良な労働者に対して、ブルジョアである悪い資本家または経営者を区別して、やがてプロレタリアートの労働者による社会革命が起り、ブルジョアが排除されて、プロレタリアートの独裁の社会主義国家または共産主義国家になると主張する。

これに対して、仏教はキリスト教のような二分思想がなく、どこまでもすべて一体であると認識する。またマルキシズムのような革命思想も持っていない。

アメリカ経営学は昭和35年頃から50年頃までの高度成長期には採用されることも多かったが、50年以降の低成長期になると、あまり用いられなくなった。高度成長期には新市場が次々にあらわれて来るので、積極的な拡張を行っても、他社との競争はあまり生じなかったが、低成長期には、計画的な拡張は他社とのほげしい競争を招き、ロスを生じるため、あまり用いられなくなって来ている。またアメリカ経営学が、利益を最大にするというように、金を第一にする点があり、それによって取引相手をきめるということになるが、これは取引相手をたえず変えるという結果をもたらし、安全性も低く、日本の伝統的な終身雇用制度もつづけることができなくなるため、あまり用いられない。

何を仏教経済学と考えるかという点については、たとえば、駒沢大学仏教経済研究所で出されている「仏教経済研究」(1号～13号)には100ぐらいの論文があり、この中には博士論文となっているものもある。また、花園大学禅文化研究所の「禅文化」にも多数の論文がある。

釈迦の原始仏教教団では、弟子達は家庭をもたず、生産活動などの経済活動は禁じられていて、生活は乞食(こつじき)だけによっていた。そして弟子達に「悟り」を体験させることが、第一の目的であったため、経済といった世俗のことは、あまりウエイトを持っていなかったと思われる。

しかし、その後、大乘仏教が盛んになる。これは悟りをひらいた仏となる可能性を出家修行者に限っていた小乗仏教に対して、出家、在家と関係なく、あらゆる人に仏になる可能性をあたえるものであった。大乘仏教の経典の中の「法華経」には「資生産業実相に違背せず」(経済も産業もそのまま仏法である)という考え方がある。

大乘仏教は中国に伝えられ、禅というかたちの新しい仏教を生み出すことになる。これは日常生活の中に仏教を取入れるもので、日常的な一挙手一投足にも、食事や就寝の中にも、仏教を入れようとするものである。

日本で仏教を本格的に学んで、取入れた最初の人として、聖徳太子があげられる。聖徳太子は天皇家に生れ、神道の影響を受けていたが、これに前記の「法華経」などの経典を重んじ、経典の大部の注釈書を作っているが、これは神道に仏教を結合させた作品と見ることができるであろう。

以後、大乘仏教は我が国の思想、政治、経済、芸術、技術の中に取り入れられて行くが、禅を日本に最初に紹介した僧侶として、栄西(えいさい、1141～1215)があげられるが、京都東山に開山した建仁寺(けんになんじ、1202～)は我が国最初の禅院として知られている。

北条氏の最初の禅の修行者は、執権、北条泰時の後を継いだ時頼(1227～1263)である。時頼は中国南宋から禅匠たちを鎌倉にまねいて、禅の研究に没頭し、その奥義を得た。鎌倉の建長寺は1253年時頼によって創建された。時頼の子、北条時宗(1251～1284)も、諸禅匠の下で深く禅を学んだ。時宗の執政の間(1268～1284)の間に数年にわたって蒙古人が来襲(元寇)したが、

これを粉碎したのは彼であった。時宗は仏光国師のために円覚寺（1282～）を建立した。時宗の廟はいまでも鎌倉の円覚寺にある。

以後、仏教は徳川時代まで、日本人の生活に大きな影響をあたえ、今日でも日本の社会の中に強く残っているが、仏教と違った思想が全面的に取り入れられたのは、1860年に幕府が創設した洋学所「蕃書調所」である。これは後に、開成所（1864）となり、明治10年（1877）に東京大学になる。明治20年には京都大学が創立され、帝国大学さらに今日の国立大学や私立大学に発展し、今日ではわが国の教育の中心的位置にあるように見える。しかし、今日、日本の大学で研究されたり、講義されたりしている社会科学は、日本の社会から大きく遊離した「空理空論」であるとOECDは報告しており、（朝日新聞、昭和59年12月1日の1面）、先進国諸国からはそのように見られている。そのため文部省でも大学教員の資格基準を変更し、民間から実務経験者を大学教授に採用するような政策を進める予定である。

わが国の社会を動かしている仏教経済学として、幕末に出た二宮尊徳などがあげられるであろう。二宮尊徳の夜話によると、巻之一の一で

「翁曰。それ誠の道は、学ばずしておのづから知り、習はずしておのづから覚え、書籍もなく記録もなく、師匠もなく、而して人々自得して忘れず、是ぞ誠の道の本体なる、渴して飲み飢えて食い、勞れていね、さめて起く、皆此類なり。古歌に“水鳥のゆくもかへるも跡たえて、されども道は忘れざりけり”といへるが如し、それ記録もなく書籍もなく、学ばず習はずして、明らかなる道にあらざれば誠の道にあらざるなり、それ我がおしへは書籍を尊ばず、故に天地を以て経文とす。わが歌に“音もなく かもなく 常に天地（あめつち）は 書かざる経をくりかへしつつ”とよめり、かくのごとく日々、繰返し繰返してしめさるる、天地の経文に誠の道は明かなり。かかる尊き天地の経文をほかにして、書籍の上に道を求める、学者輩の論説は取らざるなり。よくよく目をひらきて、天地の経文をたづぬべきなり」

と述べている。これは天地自然がその経過をよく観察すれば、誠の道をしめしていることをいい、受験勉強のように、本から知識を得るのではないことを強調している。またこれにつづいて

「それ世界 横の平（たいら）は水面を至れりとす、豎（たて）の直（すぐ）は、垂針（さげぶり、糸におもりをつけたもの）を至れりとす、およそ此の如く万古動かぬ物あればこそ、地球の測量も出来るなれ、是をほかにして測量の術あらむや、曆道（れきどう、日月の運行をはかる学問）の表（おもて、地上に立てて時刻をはかる木のこ）を立てて景を測るの法、算術の九々の如き、皆自然の規（のり）にして万古不易（ばんこふえき）の物なり、此物によりてこそ、天文も考ふべく曆法をも算すべけれ、此物を外にせば、いかなる智者といへども、術をほどこすに方なからん、それ、わが道もまた然り、天ものいはず、而して、四時おこなわれ百物成る処の、不書（ふし）の経文、不言（ふげん）の教戒、すなはち米を蒔けば米がはえ、麦を蒔けば麦が実のるが如き、万古不易の道理により、誠の道にもとづきて、これを誠にするのつとめをなすべきなり」

これによって、自然科学の基礎となっている考え方が、万古不易の道理であることを述べている。二宮翁夜話は翁の高弟、福住正兄（ふくずみ まさえ）筆記によるが、その三では

「翁曰、それ人道はたとえば、水車（みずぐるま）の如し。その形ち、半分は水流にしたがい、半分は水流に逆ふて輪廻す。丸に水中に入れば廻らずして流るべし、また水を廻る事あるべからず、それ仏家にいわゆる知識（他人を仏道にみちびく善識）の如く、世を離れ、欲を捨てたるは、たとえば水車の水を離れたるが如し」

これは中庸の道を強調しているが、乞食（こつじき）だけに生活を頼る僧侶のような生き方を一般の人はまねるべきでないことを言っている。つづけて

「また凡俗の教義も聞かず義務もしらず、私欲一偏に着（じゃく）するは、水車を丸に水中に沈めたるが如し、共に社会の用をなさず、故に人道は中庸をたふとぶ、水車の中庸はよろしき程に水中に入て、半分は水にしたがい、半分は流水に逆昇りて、運転とどこふらざるにあり、人の道もその如く、天理にしたがいて家業にはげみ、欲を制して義務を思ふべきなり」

と述べ、アメリカ経営のように金を第一と考えて、その利益最大を考えるような考え方、すなわち、本質からすこし離れて、短期的な見方をするような見方を排して、あくまでも本質を追求することを強調している。(5), (6), (7), (8)

参 考 文 献

- (1) The Jerusalem Bible. Doubleday & Company, Inc. 1968.
- (2) Pearl S. Buck: The Story Bible Volume I: The Old Testament, New American Library 1972.
- (3) John Maynard Keynes: The General Theory of Employment Interest and Money
Macmillan and Co., Limited. 1951.
- (4) Kenneth E. Boulding: Economic Analysis. Harper & Row, Publisher, Inc. Maruzen Co. Ltd.
1966.
- (5) 駒沢大学仏教経済研究所：仏教経済研究（第1号～第13号，昭和43年～59年）
- (6) 日本思想大系 52：二宮尊徳、岩波書店 1976.
- (7) "NINOMIYA SONTOKU". His Life and "Evening Talks". Kenkyusha, 1955.
- (8) 鈴木大拙禅選集，1巻～11巻，春秋社 1975.